

軒昂会

軒昂会会報 第15号
 発行者 日原 雄
 編集者 田村千秋
 発行日 平成13年5月
 発行 年3回発行
 http://www.d1.dion.ne.jp/~kekokai/

会報は年3回を予定しています。皆様の原稿お待ちしております。頂いた方にはお礼を差し上げます。原稿の送り先 秦野市渋沢 3-2-7 〒259-1322 FAX:0463-88-2967 E-Mail: c-tamura@bd5.so-net.ne.jp 田村千秋



軒昂会総会は次の次第によりおこなわれました。場所は 熱海エクシブ 日時 一月21日 出席者 三十四名 会長挨拶 会計報告 前年度繰越金 四十八万九千五百四十四円 会費・入金金 一万八千四百円 計 四十九万九千六百三十四円 次年度繰越金 三十一万八千八百八十五円 十二月度支出内訳 総会補償費 三万七千九百二十円 香料二人 二万一千円 会議費 一万三千円 一、二接統費 三万五千六百七十四円 会報作成費 四万四千四百三十二円 通信費 二万九千四百八十八円 計 十八万八千八百六十六円 尚、監査を野呂監査役にお願ひし、総会で承認されました。

新会員の紹介 山地利芳明氏、坂井真哉氏。の二名の方が入会されました。皆様は役員にそのような話題の紹介、特許申請について、川野会員のデジタル放送と会報について、田村会員の会社の現況について、本間会員の世界の美術館めぐり、桜田会員の酒を酌み交わし、友好を更に深めたい。第一、ゴルフ倶楽部に参加者 十一名。コンディションは曇りがちで、中には小雨が降りましたが、まずまずの状態です。楽しくプレーできました。

平成十二年度総会 兼新年会開催

カシユガル

六時間、砂漠をジープで走ってやっこの地を訪れたのは今度三度目になる。前回は空路だったため距離感覚は少なかったが今回は南陸路から入ったため、遠いなあ！と体で感じた。何度来ても不思議な所だ。キリギスタン、タジキスタン、アフガニスタン、カザフスタン、パキスタンと背中合わせの、国境交差点の西域最大都市「カシユガル」。人々はゴチャゴチャ主体宗教はイスラム、歴史的にも宗教戦争の度に必ず出てくる地名だ。



早くから近郊近在から口バ車に五、六人半一頭の買出し隊の列が長く続いてバザールを目指す。羊を売って必要品を買って村に戻る、何とも貨幣経済の基本パターン。偉大なアラブの神市街の中心に大きなロータリー(解放北路)がありその一角に西域最大のモスク(イスラムの礼拝堂)がある。常時コランが響いている。一日五回の礼拝を待つ男女数千人が何をすることもなく日曜日には二千人の人が集まるとか。しかしながら近頃の若者は一日五回の礼拝はしなくなったとか、それでは神道力が及ばなくなったのか。砂漠風スイカの食べ方 この地方ではスイカとメロンをミックスしたような「ハミ瓜」と言うのが夏には有名な特産である。これから国境超えをするに当たってこのハミ瓜をジープに積み込んで砂漠に入ってしまった。途中トイレ休憩をし、ハミ瓜をガブつき食べた皮を砂漠にポトンと投げ捨てたガイドが「ダメダメ」と言った。

シルクロード

小日向 啓治

超大規模のバザール光景を無視してこの地を語ることは出来ない。今回あえて日曜日に行ってみた。奥行三千口周囲十キロもあるバザールは人入人も動きも止まらず全くラッシュアワーの電車の中「無い物は無い」人身と兵器と豚肉以外は何でもあり、人歯もあれば車のフロントミラーもあらゆる品々、人ひとと。

「道端に落ちていたスイカの皮を食べて次のオアシスまで辿りついた。こんな話が今も残り見ればなるほどスイカの皮は緑を上にして積み重ねて有った。携帯電話の無かった頃の物語。今回はカラコラム、中八国境を越えインドス文明発祥の地、イスラマバードまで禁酒国ならではの話があります。ご期待下さい。



ロータリでたむろする人々

増田一恵氏、昨年十月肝逝去されました。ご冥福お祈りします。

軒昂会ゴルフ成績(ネット)

優勝	土谷	70
準優勝	本間	73
3位	徳永	73



軒昂会ではホームページを開設しています。この度掲示板を設けました。会員の皆様は自由に投稿できるシステムであり、それを会員がホームページ上で見ることが出来ます。またそのコメントに対し返事や意見をその場で書くことも出来、かつ皆様にお知らせすることが可能です。あなたのホームページ開設しませんか、軒昂会で契約してあるエリアにまだ余裕があります。また既にホームページを開設している方は、ご自分からせ下さいリンクを張ります。

軒昂会会員だより
 軒昂会員数 八十七名
 平成十二年度新会員二名
 平成十三年度新会員募集
 平成十三年度ゴルフ開催(予定)
 第五十回 三月二十六日(月)
 第五十一回 六月十一日(月)
 第五十二回 十月二十二日(月)
 お願い
 平成十二年度軒昂会年会費 千円
 計までお振り込み下さい。
 第一勧業銀行 厚木支店
 口座番号 三七一
 店番号 三三六九〇〇
 軒昂会 代表者 小泉 若根



「甲州街道歩行横山宿へ」 平成八年四月二十日に東海道五十三次完全歩行を達成した時に京都の三条大橋の袂で妻と話し合っって次の歩行ルートに妻の生れ故郷である山梨県に開路し、深い甲州街道に決まりました。実際には満六十三歳誕生日の翌日である平成八年五月六日に日本橋から歩行を開始して平成九年六月十七日に中山道との合流点である下諏訪に無事到達し、東海道に続いて夫婦二人による二ルート目の街道歩行を達成しました。甲州街道は日本橋を起点として下諏訪まで四十四の宿場がありますが、全行程を十回に分けて歩きました。歩行目標として三つの中目標を次のように定めました。第一目標は小原宿、第二目標は勝沼宿、第三目標はゴールの下諏訪です。第一目標は平成八年六月二日に千歳鳥山・八王子間を、そして第三目標は平成九年九月十八日に小仏峠越えの八王子・相模湖間を歩きました。今回は第二目標に歩行した千歳鳥山・八王子間歩行の紀行文から抽出して紹介します。午後一時四十五分：谷保交差点通過 道路の左側に天満宮の社が見えてくる。この交差点から歩いて5分程手前にオートバックスの店があり、そこに距離標識が建ち八王子まで十二キロメートル、立川まで三キロメートルと標示されています。十四時：国立市役所前信号通過近くには距離標識があり甲府まで百一キロ、八王子十一キロと記されている。この辺りの家は道路に面した部分を広く取った立派な家が多い。道路の左側に千七百九十四年に建てられたという常夜灯があり説明文が建てられている。さらにしばらく歩くと千七百九十九年に建てられた元青柳村の常夜灯も道路沿いに残されている。これらの常夜灯は防火のためを願って各村の油屋の付近に建てられた火伏せ灯籠で大正時代までは村人が交代で蠟燭を点していたとの説明がなされている。三十五：地点は元青柳村の常夜灯も同じような説明文が灯籠の脇に建てられている。説明文などを讀んだ後西に歩くと間もなく日本橋より三十六地点を通過する。ここから国立市青柳地区から立川市に入る。そこで更に二十分程歩くと、立川公園入口の交差点に到着するので日野橋交差点に向かして立川公園の中を抜けて行き日野橋を渡る。渡り始めて三キロメートル十五時：日野市内に入る。この日野は江戸時代には多摩川の渡河地点に当る甲州街道の宿駅として発展した。市内南部にある高幡不動は千葉県の成田不動、神奈川県の大山不動と共に関東三大不動として昔から参詣の人々を集めている。十分ほど歩くと日野警察署前を通過する。この地点は三十八キロメートル地点である。JR日野駅を過ぎてからの約三キロメートルの間は登り坂である。近くの距離標識によると甲府九十七キロ、大月五十六キロ、八王子七十七キロと表示されている。

編集後記
 今号から粕谷会員が3回シリーズで投稿いただきます。また、桜田会員の歩いて名所めぐりは東海道の続き甲州街道編を寄せていただきます。ありがとうございます。
 C. Tamura

「甲州街道歩行横山宿へ」

桜田 忠男



以上

やがて中央高速道路の高架橋の下を滑ってからは坂の勾配も急にになり、日野坂の分れ道を通り大坂に至る。日野坂の甲州街道は日本橋をでてから内藤新橋、高井戸、下高井戸、国領、下布田、上布田、下石原、上石原、府中、日野、とここまで十の宿場があったが次の十一番目の横山宿は現在の八王子市である。八王子は大正6年(千九百十七年)に市制が施行されたが、その後昭和三十年(千九百五十五年)に元八王子、川口、恩方などとともに八王子市に編入されたという。編入時のいきさつはよくわからないが旧宿場の名前が現在の地名にまったく反映されていないことも珍しい。十七時：JR八王子駅到着。九時に京王線千歳烏山駅から歩行開始して丁度八時間が経過し約二キロメートルを歩き続けた。妻は八王子の町がはじめてであったが疲れも出たし、夕暮れで町の灯りが目立つようになったので町田までの切符を買って横浜線のホームへと急いだ。(以上甲州街道投稿文1)

庄内の四季と随想

粕谷宏夫

一幼き頃の追憶
人は誰しも、常日頃、色々な場、時々なかに生きて、様々な事に思いを巡らしながら生きていくなのだと思う。そんな中、瞬時に過ぎ去ってしまふものもあれば、何時迄も居続けるものもある。千変万化、折に触れて憶うものの中に、生れてより小学校卒業迄過ごした我が故郷がある。他人には何故にこう迄何時迄とも見えるかも知れない。それは遠きにあるが故とか、美しき自然があるとか、墳墓の地であるとか、竹馬の友が居るとかではない。私を惹き付けて離さぬその最たるものは、めりはりに富んだ四季、風土にあるからだと思う。明治後半から大正にかけて活躍した歌人、九条武子(一八八七-一九二八)は、或る隨筆で、季節のうつろう時にこそ、大いに歌心を掻き立てられると語っている。私にとっても、故郷、庄内の魅力は季節の移り変わりに有るのかも知れない。その山形の庄内地方、庄内平野とはどんな所か、簡単に触れて見よう。山形県は、四つの地区に分類できる。即ち、内陸部の南から、米沢市を中心都市とする米沢盆地、その北、略県央にある県庁所在地山形市を中心都市とする山形盆地、更に北、秋田県の南に位置し、山形新幹線の終点新庄市を中心都市とする新庄盆地、最後は県の西、日本海に面した庄内平野である。そして、これら四地区のすべてが、日本三急流の一つ最上川の流域に沿って成立している。県民歌、最上川舟唄、遠くは松尾芭蕉の俳句にも詠まれ、山形県のシンボリック的存在とも言える。

初、此の庄内平野は、東は月山を主峰とする出羽丘陵で、西は庄内大砂丘を経て日本海に面し、南は朝日連峰が海迄迫って新潟県に接する。北は出羽富士、鳥海山が聳え秋田県と堺にしている。今日に於いては、最上川の水の恩恵による、日本の代表的穀倉地帯として知られているが併し、かなり古くから拓けていた。平野の北部には、河口に発達した港町、江戸時代には西廻り航路の要所として海運交易により繁栄を遂げてきた商都酒田市があり、平野の南部地区には庄内藩十四万石の居城、鶴ヶ岡城を中心に栄え、又、庄内発展の中核都市でもある鶴岡市があり、此の二市を中心に発達してきた地方である。

余談ではあるが、鶴岡はよく文士を輩出している都市で、明治の文豪、高田樗牛、近年では、丸谷才一、藤沢周平、上智大教授で評論家の渡部昇一などが作家のなかで、ピジネスマンに人気の高い時代小説の作家、藤沢周平の数多くの作品の舞台にもなっている海坂藩、その取りも直さず庄内藩であり、風景は、氏の故郷、鶴岡をイメージしたものと云われて

所で、話を本筋に戻すが、私が生れてから旧制横濱高等学校(学号一四九四年四月)する迄通ったのは鶴岡、酒田、の様な都市部では無く両市の中間、遮る物とて無い庄内平野のど真中の町、余目である。何故此の余目は後に触れる事になるかとも思ふ、では本題である子供の頃に過ごした庄内の田舎町での四季折々の出来事等々に就いて、思い付くまま語る事とする。

春

1-1 雪割り
庄内地方は、西の出羽丘陵、更に西の内陸の奥羽山脈沿いとは異なりさほど積雪は多くない。併し、雪を伴った風の強い事では、日本の中でも名にし負う、庄内の冬に就いては後の冬の項で詳しく述べてみたい。

初、冬も終りに近づく、急に辺りが静まり返り、薄ひさえ濡れ始める。と、いよいよ待ち焦がれた春の到来である。そうなる、人々は生活に農作業、その他にとり邪魔な存在でしかなかった雪を除去し大地を見たい、踏みたい、そんな思いに駆みれるのである。思い思いに、踏み固められた家の前の道路の雪を、頑丈な専用のスコップで削っては捨て、その春先の行事であった。それには、我々子供達も嫌がらずに参加、地面が乾くと、外の空気を一杯に吸いながら、「こま」による春の遊びに興じたものである。

2-2 雨垂れ
太陽が顔を覗かせる事が多くなり、陽射しも徐々に強くなると、屋根の雪解けが始まる。家の周りのそこかしこで単調な雨垂れの音がひねもす聞こえ、時折「ドドー」と音を立てて落ちる屋根の雪に、春眠の夢が掻き消される。こうなる春の足音も本物と言えることになる。

今でも、時々眠りに就けぬ折、こんな春の温もりに満たされ、やがて春の昼下がりに思いを馳せると、自然と眠りに入るから不思議である。
有難き哉！故郷。

3

早春賦

冒頭に述べた縁起す追憶の中に、忘れ得ぬ歌がある。それは吉丸一昌作詞、中田章作曲の名曲「早春賦」である。

父は、旧制中学、高等学校では教師として、生物を担当していたが、時には音楽も教えていた。家でも、レコードやオルガンでよく音楽を聞かせてくれたものだ。そんな父が春未だ浅き折、家の側の雪解け水の流れる小川の辺りで、「春は名のみ、風の寒さや」と唄って、思い出される。唄う事の好きな私にとっても大切な歌の一つでもある。

平成十三年三月二十六日

自分の時間

光陰矢の如しと云われるように、月日の経過するのは早いもので退職してから8年になる。もう退職して何一考える事などのないような生活になるか、想像した事もなかった。多勢の方達が退職前から、あれこれと驚く程の用意周到な生活設計を模索している事を耳にしているが、私などは退職する日迄、何の将来構想も立てていなかった。退職してより3、4ヶ月は、無類の喜びと開放感にひたつて、こんな気ままな楽しい生活が世の中にあつたのかと只漠然と日々を送っていた。何の制約も受けない日を送っていた。足腰は弱り体調も大なるのみとなつてしまった。

生氣を取り戻すために、今まで出来なかつた自由気ままな旅に出掛けることにした。北海道を手に始め、しかしながら、無計画の自由気ままな旅は、長続きしなかつた。時間にも、行き先にも制約がない漠然とした旅では、感動も薄く、出掛ける回数も当然の事ながら減つて終つた。見ず知らずの土地を、楽しんで感動しながら歩む歩むには、体調を整え、目的を持って計画的に興味を持って続けなければ長続きしないことを知った。

趣味といえる程でもないが、退職してよりカメラを担いで自然を求めて、野山に出掛けることが多く、未知の自然と野生動物等に出会って感動し、写真撮影に明け暮れた。残念ながら、付け焼き刃的な撮影技術では、満足感を味わえるような写真は出来なかつた。

世の中の人達が現役を退いてからは、暇を持て余す為、趣味でもない写真の世界に、のめり込む人が溢れていることは、行く先々に俄々写真家の多いのに驚かされる。

もう少し頭の軟らかい間に将来設計をしっかり立てるべきである。しかし、将来設計をきつちりと立てても、自分の時間を少しも使わずにして去つて行く、可哀想なものもある。何ともいえないが、情報と技術が格段と向上している。写真の世界に入り込むのは容易ではあるが、一定のレベルに到達する事は、並大抵の事でない。自己満足でも、まあまあなレベルになるためには、体調を整え、精神力と忍耐力を兼ね備えなければならぬ。写真は、光を何処に表現するかの



日原 雄

芸術だといわれている。自然を対象として撮るには、太陽が上方にない朝早くか、夕方又は、夜の光をどのように取り入れるかによって決まる。同一場所に長時間居座ることが出来るのか、忍耐力によつて左右され、明るい太陽のもとで撮った写真は、記念写真には優れているが芸術写真には程遠い。

私のような怠け者(朝早いのは苦手で、夕方方は、早く帰って一杯やりたい)には、難しい事ではあるが、何とか、皆様に評価していただける一枚を撮ることに頑張りたいと思つている。